

I

イギリス19世紀中葉に、『フレイザーズ・マガジン』(Fraser's Magazine)誌上で、「黒人問題」をめぐる論争が展開される。その発端は、同誌1849年12月号に掲載されたカーライル(Thomas Carlyle)の議論である。カーライルは、その中で「強い者が弱い者を、偉大で気高い者が卑小な者を、賢者が愚者を奴隷にする」と言い、「黒人は白人のしもべとして生まれた」と述べた。¹ これに対し、当代きってのリベラリストであったミル(J. S. Mill)は即座に同誌の翌月の1850年の1月号に反論を載せ、「苦痛を取り除くこと、専制支配をやめること、残酷な仕打ちを廃棄すること」が「時代の責務」と述べ、黒人の「人権」を擁護し、人種の平等を説いた。² カーライルとミルはこの論争から、さらに十数年を経て、火花を散らすことになる。きっかけは、1865年10月にジャマイカで勃発した「モラント湾の暴動」(“Morant Bay Rebellion”)と呼ばれる事件だった。この暴動は、奴隷解放後も白人の寡頭支配に不満を抱いていた黒人農民による決起である。ジャマイカの総督であったエア(Edward Eyre)は、戒厳令下で徹底的な粛正を断行し、数百名の黒人を死に追いやるが、その後、「王立ジャマイカ委員会」の調査により事件の全容が明らかになるにつれ、エアを告発する一派が形成され、ミルは「ジャマイカ委員会」を率いて、反エアの急先鋒となり、³ 他方、カーライルは「エア弁護基金委員会」の中心人物として活躍した。⁴ この時、ディケンズ(Charles Dickens)はエア擁護派に廻ったことが知られているが、彼はエアのために募金活動をしたり、公開討論会に出たりといった積極的な行動には出ていない。⁵ しかし、「エア論争」の起きる10年以上も前に、ディケンズは『荒涼館』(Bleak House, 1852-53)の中で、「ポリオプーラ・ガー」という黒人植民地建設の夢にとりつかれ、そのために家庭を顧みなくなったジェリビー夫人(Mrs. Jellyby)を描き、彼女を戯画化している。例えば、ジェリビー夫人の娘のキャディ(Caddy)が次のように母を批判する場面がある。「私には心の平安はないの。アフリカの話はもううんざり。何と言ったかしら、そうそう、人間は兄弟、と言ったんだっけ、それを聞いたらもう私は最悪。」⁶ ここから、ディケンズの植民地に対する冷淡な姿勢が看取されるのであるが、実は、彼は別の場で明確な人種差別宣言を行なっている。それは、彼が編集主幹を務めた雑誌である『馴染みの言葉』(Household Words)の1853年の6月11日号の「高貴な野蛮人」と題する文である。そこでディケンズは「私は高貴な野蛮人などという言葉を用いない」と切り出し、「野蛮人は残酷で、嘘つきで、盗み癖がある人殺し」と痛罵した上で、「野蛮人はいなくなった方が、世のためになる」と断定する。⁷ ここで言及される野蛮人とは、「ブッシュマン」であり、「カフィール人」である。つまり、ディケンズにとって、野蛮人とはアフリカの黒人とほぼ同義であった。

しかし、ここに見られるような黒人蔑視は当時のヴィクトリア朝イギリスに深く潜行する根源的な差別でもあったのである。少なくともディケンズは突出した黒人差別主義者ではなかった。それを示す三つの例を挙げることができる。一つは、この時期に勃興した人類学の成立である。1860年代に入って間もなく始動した「ロンドン人類学協会」(“Anthropological Society of London”)は、もともとはクエーカーのキリスト教的博愛の精神のもとに結成された「原住民保護協会」の流れを汲む穏健な「民族学協会」(“Ethnological

Society”)から分派したものである。しかし、この「ロンドン人類学協会」を率いていたハント(James Hunt)は過激な人種偏見論者として有名な人物であり、彼はヒトの由来を単一の種に求める「人種単一論」(“monogenism”)を否定し、複数の種を想定する「人種多元論」(“polygenism”)を支持していた。この多元論は、簡単に言うと、黒人と白人を根本的に異なる生物として認識するための理論的根拠となったものであり、ハントの人種差別より出立した人類学は瞬く間に、急成長を遂げ、1864年には会員500余名を擁し、イギリスでかつてこれだけ短期間に増大した科学の団体はない、と評されるまでになる。⁸ つまり人種差別の科学でもあった初期人類学は、ヴィクトリア朝の知識人、科学者に内在していた他者を差別する欲求と合致したのであり、裏返すなら、1860年代に、黒人蔑視の思想はある頂点を迎えていたことを示す。

もう一つの事例は、ブランドリンガーが「人種差別主義者のファンタジー」(“racist fantasy”)と呼んだ白人と黒人を単純な二元論で捉え、後者を常に悪人に仕立て上げる、ヴィクトリア朝期に流布したメロドラマの形式である。⁹ ディケンズがもともとは役者志望であり、劇団を主宰したり、後年、自作の公開朗読会に熱中したことはよく知られている。彼の小説がメロドラマの常套的手法を踏襲したり、またメロドラマの影響を強く受けたことも指摘されている。¹⁰ 直接の影響関係はともかくとしても、彼の小説は当時のメロドラマの一つの型となっていた「人種差別のファンタジー」と時代を共有するものであった。ヴィクトリア朝中期を取り巻いていた人種差別(黒人蔑視)がいかに根強く、深いものであったかを示す例としてさらにダーウィン(Charles Darwin)の例を付記することにする。1832年に「ビーグル号」の船上で、黒人奴隷廃止の法案通過を聞いて快哉を叫んだ熱烈な奴隷廃止論者のダーウィンですら、¹¹ 人種差別の思想を払拭できなかったことは否定できない事実である。例えば、Desmond & Moore は、「ダーウィンは黒人は劣等であると考えていたが、奴隷制は嫌悪した」と述べているし、ダーウィンのビーグル号の航海日誌にフェゴ島の「野蛮人」への嫌悪感が明確に記述されている。¹²

II

黒人蔑視、人種差別の根底にあるのは、人間の深層に普遍的に根を張り、頻繁に覚醒する差別といじめへの欲動である。文学の原型と神話の理論の大著Anatomy of Criticismの著者のフライ(Northrop Frye)は、文学におけるパルマコス(生け贄の山羊)の典型的な例として、天才肌の芸術家、ユダヤ人、黒人などを挙げている。¹³ そして言うまでもなく、ディケンズはこのパルマコスを効果的に利用し尽くした作家である。例えば、ディケンズが好んだパルマコスの類型に「子供のパルマコス」がある。これは冷酷な大人社会の犠牲者として造型されるいたいけな子供のイメージを持つものである。また、「女性のパルマコス」もディケンズの作品において重要なタイプを形作る。典型的には、このタイプは、ヴィクトリア朝という男性優位社会で抑圧され、その能力が否定される女性という形を取る。この型はさらに素質・性格に応じて、従順な女性と反抗的な女性の二つに分けられ、特に前者は、みずからの美德で縛られる「家庭の天使」として美化される。さらに「下層貧民のパルマコス」とでも呼ぶべき存在がある。そして「悪党・犯罪人のパルマコス」がある。これは、その自らの悪行ゆえに、地獄落ちする人物で、結末近くで破滅するか、刑務所送りにされる。注意すべきは、このパルマコスの中に、もう一つのパターンが隠れていると

ということである。それは、迫害される「ユダヤ人」であり、その典型的なイメージを、Oliver Twist (1837-39)のフェイギン(Fagin)とDavid Copperfield (1849-50)ユライア・ヒープ(Uriah Heep)の中に求めることができる。¹⁴付言するなら、フライの指摘にある通り、迫害される民族として、ユダヤ人以外に、黒人がしばしば迫害の対象となるが、少なくとも明瞭な形でこのような黒人はディケンズの作品に登場していない。¹⁵

無論、ここにあげたパルマコスの分類は、相互に排他的であるよりは、幾つかの型にまたがって、あるいは融合した形で現れる。しかし、以上の分類より明らかになることは、ディケンズの小説の構造原理に、パルマコスが常にいるということであり、そのパルマコスがヴィクトリア朝における社会制度や政治の状況を映し出す鏡となっていることである。つまり階級制度、男性中心主義あるいは父権制、植民地主義、等々の政治・社会のイデオロギーと密接不可分な形で、ディケンズの小説において、パルマコスが造型され、再生産されている。

III

パルマコスの文脈で、『大いなる遺産』(Great Expectations)を見るなら、「悪党・犯罪人のパルマコス」を踏襲するものとして、小説の主人公ピップと小説冒頭部から関わりを持つことになる犯罪者マグウィッチ(Magwitch)がまず注目される。マグウィッチはしかしピップと出会ってまもなく捕縛され、彼は当時の「新世界」であり流刑の地であったオーストラリアへ送られ、以後、彼は小説の表舞台から消え去る。その後、マグウィッチは新天地で牧羊業などで財をなし、その得た資金を弁護士ジャガーズ(Jaggers)を介して、ピップに送り続け、かつて食べ物と鉄枷を切るやすりをくれたピップに恩返しをする。マグウィッチは流刑の地から母国へ帰国することは許されていなかったが、やがて彼はピップの姿を見届けようと命を賭けてイギリスに帰還する。その帰ってきたマグウィッチの処遇に手を焼いたピップは彼をテムズ川から外国航路の船に乗せ、彼を国外脱出させようとする。しかし、脱出の間際にそれは失敗する。なぜなら、マグウィッチのかつての共犯者であり、そのためにマグウィッチが不当に多くの罪を着せられる原因となった彼の宿敵コンペyson(Compeyson)がその行動を察知して警官とともに追ってきたからである。

このような軌跡を示すマグウィッチには幾つもの、そして重層的ともいえるパルマコスのイメージが看取される。彼は犯罪者であり、国外追放となった流刑囚であり、蔑まれ、傷つけられ血を流す人間であり、ピップにとっては厄介者であり、生まれは卑しく、監獄という囲い込まれた空間に包摂され、監視される存在である。彼は、狡猾なコンペysonにだまされ、イギリスの法制度のもとで、違法者として烙印を捺され、ついには死刑という最終宣告を受ける。しかし、マグウィッチは植民地からピップに「富」を送り続けた存在だった。ピップはその事実を知って驚愕し、後ろめたさにとられる。マグウィッチにもし民族・人種のパルマコスの象徴があるとするなら、マグウィッチと結びつく富、金銭との関係において、ここにユダヤ人の相貌を認めることは十分に可能である。しかし、さらなる可能性が残されており、それは、マグウィッチの中に、ディケンズがあまり他では用いていない、異例とも言うべき、黒人のパルマコスのイメージを読み取ることである。このことはマグウィッチが大英帝国下の植民地と密接に繋がる記号性を有していることから推論できる。18世紀末葉から19世紀中葉にかけてオーストラリアはイギリス本国の流刑

地として機能しており、¹⁶ そこに重罪人のマグウィッチが送り込まれることは歴史的事実と符合している。ただし、ここで重要になるのは、オーストラリアが記号として惹起する植民地のイメージである。植民地はヨーロッパ列強間の民族と国家、さらに原住民、そしてアフリカから連行されてきた黒人、等々を巻き込み、様々な民族間の意地や武力が衝突する座標軸を提供したと考えられる。簡略化するなら、植民地において他者の侵略があり、異なる他者同志の闘争の末に、敗れた弱者が差別され、迫害された。そこは、土着のインディオなどの原住民対植民者（白人）という二項の対立が前景化する空間であったばかりでなく、ヨーロッパの諸国家を背景に持つ多様な白人の入植者（侵略者）たちの利害がせめぎ合い、闘争を繰り広げる場でもあった。事実、例えば、ルイ14世にちなんだ名前を持つアメリカ合衆国のルイジアナ州は1682年から1800年にかけて、フランス領、スペイン領、フランス領と変遷をたどっているし、カナダ東端の州のニュー・ファウンドランドは、1713年のユトレヒト条約の締結でイギリス領に決着するまで、イギリスとフランスが領地権をめぐる熾烈な争いを展開している。あるいは、西インドのジャマイカは、1509年にスペインに征服されるが、1670年にイギリスがスペインから奪い返し、それ以後18世紀にかけて、イギリスはジャマイカを巨大なサトウのプランテーションに仕立て上げ、大量の黒人奴隷を送り込んでいる。しかし、いずれにしても、ある国家の植民者が勝利をおさめた時、その土地での権力構造は明確な二重構造を取るようになる。つまり、植民者対白人、あるいは、支配される黒人奴隷（および原住民）と、支配し、搾取するヨーロッパの白人という構図に収斂するのが通例である。17世紀末に世界最大規模の植民地を展開した大英帝国を例に取るなら、イギリスはこのような脈絡において、バルバドス、ジャマイカに陸続とアフリカの黒人を奴隷として送り込むことになる。ある統計によると、1680年から1783年にかけてのおよそ一世紀の間に、イギリス領西インド諸島に送り込まれたアフリカの黒人の総数は200万人を超えるのである。¹⁷

ディケンズが野蛮人と黒人をほぼ同義に捉え、彼らを嫌悪していることはすでに見た通りであるが、次に見るのは、この植民地の文脈の中でディケンズと黒人奴隷が結びつく事例である。ディケンズは1842年1月4日から、同年6月29日まで、アメリカとカナダ周遊の旅に出ており、その結果、『広い流布を願ったアメリカ印象記』(American Notes for General Circulation, 1842)が書き上げられる。「広い流布を願った」という少し奇異なタイトルは、ディケンズのアメリカでの失望の一つの要因ともなったアメリカで認められなかった国際著作権問題に由来しており、印税が支払われずに彼の本の海賊版が出まわることを暗に皮肉っている。¹⁸ 当時のアメリカ合衆国はオーストラリアと同じ「新世界」でありディケンズは希望に胸膨らませての旅だったが、彼は至るところで苦い失望を味わう。彼のアメリカでの失望の重大な原因の一つに印税問題があり、さらにアメリカで彼が目にした奴隷制度があった。例えば、ディケンズは『アメリカ印象記』の第17章で、奴隷たちはやさしく、人道的な取り扱いを受けているという奴隷の主人たちがよく用いるレトリックに反駁するために、彼が新聞で見た「逃亡奴隷」の捕縛への報奨金の広告記事を延々と引用している。そこでの逃亡奴隷たちの肉体の描写は、彼らがムチで打たれ、耳を欠かれ、歯を折られ、ピストルで撃たれ、焼き鑊で顔などに烙印を押されていることを赤裸々に語っている。一例を挙げると以下のような次第である。「逃亡奴隷。女のニグロで、子供二人と一緒に。数日前にも逃亡を企てた。その時、私は彼女の左の頬を熱した鉄で焼いて

やった。そこにMという字を書こうとしたのだ。」¹⁹ 他の40余りの記事もほぼこれと大同小異である。

1853年に「高貴な野蛮人」で露呈したディケンズの黒人蔑視と、1842年時点での、アメリカにおける奴隷制に対して彼が見せた激烈な非難の齟齬はひとまず措くとして、ここで興味深いのは、彼に強烈な印象を与えたに違いない逃亡奴隷の記事が喚起するイメージが、『大いなる遺産』の冒頭部のマグウィッチの図に酷似していることである。マグウィッチとアメリカの逃亡奴隷は二つの点で似ている。一つはまず外貌である。ピップの前に突然現われた脱走した囚人マグウィッチは、重い鉄の足枷を引きずっており、ずぶぬれで、泥にまみれ、傷だらけである。そして、にらみつけ、うめきながら、身体を小刻みに震わせ、歯をガチガチと鳴らしている(I, I, 4)。²⁰ マグウィッチは「イラクサに刺され、野バラに身を切られ」血を流しているのである。それは首や手足に鉄の枷をはめられ、ムチで打たれ、焼き鑊の烙印の傷が生々しい逃亡奴隷の図を彷彿とさせる。自由を束縛するものとしてここで象徴となっているのが、両者に共通する鉄の鎖である。このように『大いなる遺産』のプロットの根本にマグウィッチの肉体を縛る鉄がある。さらにやすりをマグウィッチに与えるピップはこの鉄を切る者として物語に登場する。つまり、囚人マグウィッチの苦痛を和らげ、彼を束縛から解放する主体としてピップは現われ、『大いなる遺産』の物語はこの鉄の切断のイメージから始まる。作品全体の底流に流れている、ピップに対する資金(遺産)の提供という以後のマグウィッチの恩返しの行為もこの鉄からの解放に由来する。もう一つの両者の共通点は、マグウィッチも奴隷も逃亡者であり、国家権力によって追跡され、それから文字通り、命を賭けて逃げる存在であるということである。マグウィッチは囚人船からの脱走者であり、アメリカの奴隷は残酷な主人から逃げようとしている。『アメリカ印象記』でひとしきり逃亡奴隷の記事に言及した後で、ディケンズは「折れた手足、血を噴く肉体、折れてなくなった歯、ムチ打たれた背中 (中略) 焼けて熱くなった焼き鑊は無数にある。しかし、読者の方ももううんざりで(“sickened”)、辟易されているだろうから別の話題に移ろうと思う」と述べている。²¹ しかしもっとも嫌悪感を覚えていたのは他ならぬディケンズだったにちがいない。肉体が痛めつけられる、例えば拷問の図像は我々の脳裏に激しい記憶を残すが、それと同じことがここでディケンズの記憶に作用したのではないだろうか。そして、20年近くもの時空を超えて、『大いなる遺産』のマグウィッチの描写に、かつてアメリカでディケンズが見聞きした傷つき逃亡する黒人奴隷の図が蘇った、のではないか。

IV

マグウィッチと黒人奴隷の共通点をさらに挙げるなら、それは自由を縛る鉄のメタファと関連している監獄のイメージがある。言うまでもなく、奴隷の強制労働の場であった大農場(プランテーション)は、個人の自由を奪い、強制的に限定された空間に閉じ込めるといふ点でほぼ監獄と同じ機能を持つ。他方、マグウィッチの人生の大半を占めるのが文字通り、監獄である。例えば、マグウィッチはピップに自己の来歴を語って次のように言う。「監獄に入って出て、また入って出て、そしてまた入って出て。もう、わかったらう。これが俺の人生さ。」(“In jail and out of jail, in jail and out of jail, in jail and out of jail. There, you’ve got it. That’s my life pretty much. . . .” [III, III, 344])。かりに出所し、監獄外

部に身を置いたとしても、マグウィッチは今度は、奸策を弄するコンペysonに管理され、支配され、いつもコンペysonのいいなりになっている(“I was . . . always under his thumb” [III, III, 348])。コンペysonはパブリック・スクール出の、教育もある、立派な紳士として通っているのみでなく、その容姿も端正であった。これは、少年の頃から浮浪児で、物乞いをしたり窃盗をして、刑務所暮らしをしてきたマグウィッチとは対照的な人間像である。マグウィッチがコンペysonに初めて会った時、コンペysonは懐中時計を持ち、指輪をはめ、ネクタイピンをつけ、洒落た服を着ていたが(III, III, 346)、ここで、コンペysonに付与される立派な「イギリス紳士」のイメージは注意を要する。コンペysonはこの時、マグウィッチを悪事を働く一味として引き込もうとしており、マグウィッチに「お前さん、随分景気が悪そうじゃないか」と声をかける。マグウィッチは「へい、旦那、もうさんざんでね」(“Yes, master, and I’ve never been in it [luck] much.” [III, III, 346])と答えるが、この時、マグウィッチは「旦那」(“master”)と呼びかける。景気の良い「イギリス紳士」が一方におり、運に見放され、まったく景気の悪い男が他方にいる。ここに本国イギリスと植民地が織り成す搾取の構造のアレゴリーを読み取ることができるかもしれない。実際、オーストラリア植民地に送り込まれたマグウィッチは本国にいるピップに富を貢ぎ続けていたし、マグウィッチはイギリス的な(似非)紳士のコンペysonに騙され、搾取されてきた。例えばマグウィッチがピップに語る次のような言葉は示唆に富む。「俺が手に入れたものはお前のものだよ (中略) 俺の作った紳士が、紳士らしく金を使うのを見るために俺は故国へ帰ってきた。」(III, I, 330)

さらに、マグウィッチは、まるで「奴隷」がするように、自己を卑下して、イギリス紳士のコンペysonを“master”と呼ぶ。実は、ここで他ならぬマグウィッチが、自身とコンペysonの関係を、「黒人奴隷」の比喩を使い、明確に規定している。マグウィッチは言う。「あいつは俺に網をかけ、俺を奴の黒人奴隷(“black slave”)にしたんだ」(III, III, 348)。ここで何気なく使われている「奴隷のメタファ」は重要である。なぜなら、このむしろ素っ気ないメタファのレヴェルに奴隷という言葉が浮上すること自体が、作者を取り囲んでいた社会のコンテクストにおける奴隷という存在の濃密さや普遍性を暗示するからである。いわばディケンズは黒人奴隷という文脈において過去と現在の二点間に包囲されていたともいえる。過去に関しては、20年近く前のアメリカにおいて血を流し烙印を捺された逃亡奴隷の生々しい記憶があり、現在については、ミルとカーライルに代表される黒人問題をめぐる激しい論争がある。さらに、白人を善人に、他方、黒人を悪人に仕立て上げる「人種差別主義者のファンタジー」を具現するヴィクトリア期におけるメロドラマの流行があった。付け加えるなら「人種多元論」を背景に、黒人蔑視の科学として1860年代に興隆した人類学がある。そして多分、ディケンズの「高貴な野蛮人」は以上のようなヴィクトリア朝中期の人種差別のプログラムの上に、無意識の上で便乗している。

V

マグウィッチと黒人奴隷の類縁関係を示す最後の例として、取るに足らぬ些末なことこそ重要であるというフロイトの箴言に倣い、小さな具体例を挙げておきたい。なぜ些細なことに注意を払わねばならないのかというと、フロイトの精神分析によれば、実際に見る表層としての「顕在夢」は、その材料である「潜在夢」の重要な部分が欠落した断片に過

ぎず、また「顕在夢」においては「潜在夢」の重要な中心がずらされており、そのために些細な事柄（だけ）が、しばしば隠蔽されている重要な意味への糸口になるからである。本論においては、作者ディケンズが、黒人（奴隷）問題に関して、夢と同じようにコンプレックス（無意識）を隠蔽する複雑な「偽装」をしていることを疑っており、したがって、「些細なこと」はきわめて重要な意味を内包する可能性があることを想定している²²

作品における些末な事物の例は、ここではタバコの名称である。マグウィッチは、彼の愛好するタバコという所有物によってメタフォリカルに黒人と結びつけられるが、それはマグウィッチが好んで吸うタバコの名が「黒人の頭」（“Negro-head” [III, I, 329]）と呼ばれているからである。ここから少なくとも、二つのことが言える。一つは、自由を縛る「鉄の鎖のメタファ」がそうだったように、マグウィッチに黒人と結びつく属性やメタファが使用されやすいということである。メタファとは、別の言い方をするなら、意味のすり替えであり、主体（作者）が、そこで何らかの虚偽の申告をしていること、あるいはそこに何らかの重要なコンプレックスが関与していることを強く示唆する。いずれにしても、流刑囚マグウィッチの吸うタバコが「黒人の頭」という意味深長な名称を有すること、さらに、すでに見たように、彼が自分自身を卑下して自分を「黒人奴隷」と呼ぶことなどから、マグウィッチと黒人（奴隷）のイメージが緊密な照応関係を示す傾向があることがわかる。

もう一つのことは「黒人の頭」（“Negro-head”）というタバコの名称は、同時代の黒人奴隷の植民地の文脈を浮き彫りにしていることである。OEDによれば、「黒人の頭」という名称のタバコは、19世紀を通じて知られた実在のタバコであり、同辞典は、1809年、1839年、1851年、1858年、1861年、1892年の用例を記している。²³ これだけでは、なぜタバコが「黒人の頭」と呼ばれるように至ったのかまではよくわからないが、ダヴィディーンは、このタバコの名称の歴史は、少なくともイギリス18世紀までさかのぼることができることを、多数の「タバコ広告」の図版を用いて説明している。末尾に示した2点の参考図版は、ダヴィディーンの著書からのものである。²⁴ これらはホガースの版画と同時代のものとされており、18世紀前半から中葉のものと思われるが、残念ながら、正確な年代は不明である。しかし、これらのタバコの広告図からは、サトウやコーヒーと並ぶ植民地のプランテーションの代表的な産物であったタバコは、黒人奴隷のイメージと図像学上直結していたことがわかる。マグウィッチが『大いなる遺産』で吸っているタバコの背景に参考図版のようなタバコの広告をはめこむなら、あるいは18世紀から19世紀に至る植民地の産品としてのタバコと、「黒人の頭」というタバコの伝統的な名称を想起するなら、ここでもまたマグウィッチは、植民地の黒人奴隷のイメージと親和関係を取り結ぶのである。

作品の遠景に、18世紀から19世紀中葉にかけての大英帝国の植民地の文脈が存在していること、またその文脈を推し量る一つの有効な存在がマグウィッチに他ならないことはここで特に明記しておきたいと思う。すなわち、『大いなる遺産』は、一面において、黒人奴隷と黒人問題をめぐる小説であることを本論は指摘する。²⁵

Notes

¹ Carlyle, “Occasional Discourse on the Nigger Question,” *Thomas Carlyle Works* 29 (London: Chapman and Hall, 1899) 348-83, esp. 360, 379. カーライルは主人と奴隷の関係を、金銭では結びつけられない、永続的な相互の信頼関係によってのみ成立する主従関係として捉えている。

² J. S. Mill, “The Negro Question,” *Collected Works of John Stuart Mill Vol. XXI* ed. John M. Robson (Toronto: U of Toronto P, 1984) 87-95. しかし、ミルにも「文化優越主義」はあったとする意見がある。Simon Gikandi, *Maps of Englishness* (New York: Columbia UP, 1996) 50-69参照。

³ J. S. ミルは“Jamaican Committee”の委員長で、エアを告発する側の中心人物として活発な運動を展開した。ジャマイカ委員会の構成員は、364人も多数であり、これだけでも、当時の論争の広がりを間接的に傍証する。J. S. Mill, *Autobiography* (1873; Harmondsworth: Penguin, 1989) 217-19 参照。

⁴ 「モラント湾の暴動」とその後の経緯については、Lawrence James, *The Rise and Fall of the British Empire* (London: Little Brown and Co., 1994) 193-94, Gad Heuman, *The Killing Time: The Morant Bay Rebellion in Jamaica* (London: Macmillan, 1994), 山下重一、『J. S. ミルとジャマイカ事件』(東京:御茶の水書房、1998)を参照。

⁵ Fred Kaplan, *Dickens: A Biography* (Sevenoaks: Hodder and Stoughton Ltd., 1988) 480-81.

⁶ Charles Dickens, *Bleak House*, ed. Andrew Sanders (London: Everyman, 1994) Ch. 14, 169. キャディの「人間は兄弟」というフレーズは、奴隷制解放運動の支柱となったチャールズ・ダーウィンの母方の祖父のジョサイア・ウェッジウッド一世が案出したスローガンの“Am I not a Man and a Brother?”へのあてこすりである。

⁷ Dickens, “The Noble Savage,” (Saturday, June 11 1853) *Household Words* Vol. VII (1853; Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1989) 337-39.

⁸ George W. Stocking, *Victorian Anthropology* (New York: Free Press, 1987) 245-52.

⁹ Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell UP, 1988) 206.

¹⁰ 例えば、クーシクは、ディケンズの小説に普遍的に見られるパターンとして、英雄と悪漢の鮮明な二項対立を取り上げ、この善と悪の構造が、ディケンズの芸術における過剰なもの、メロドラマの要素、感傷主義を生み出すと指摘している。John Kucich, *Excess and Restraint in the Novels of Charles Dickens* (Athens: U of Georgia P, 1981) esp. 43-132.

¹¹ Janet Brown, *Charles Darwin Voyaging* (Princeton: Princeton UP, 1995)197.

¹² Desmond & Moore, *Darwin: The Life of a Tormented Evolutionist* (New York: Norton, 1992) xxi. ダーウィンの黒人と奴隷制をめぐる意識の葛藤については、Takashi Nakamura, “Implied Slaves in *The Origin of Species*” (*Bulletin of Yamagata University* Vol. 14 No. 2, 1998) 287-305を参照。

¹³ Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (Princeton: Princeton UP, 1957), 41-42.

¹⁴ フェイギンは作中でユダヤ人であることが明記されているが (Oliver Twist Ch. VIII)、ユライアはユダヤ人であるとの言及はない。しかし、ユライアはイスラエルの王ダビデに妻バテ・シェバ (バテシバ) を寝取られる武将の名前であり、ユダヤのイメージを強く喚起する。またユライアには、フェイギンと同様に、強欲な悪党というユダヤ人のステレオタイプ化された属性が付与されている。悪魔と呼ばれたイスカリオテのユダとキリストを迫害した律法主義者としてのユダヤ人 (ユダヤ教) から生じた、ユダヤ人は悪者であるという連想は、中世以後のキリスト教に通底し、例えば、イギリス・ルネサンスにおいて、マーロウの『マルタ島のユダヤ人』やシェイクスピアの『ベニスの商人』に結実している (「ヨハネによる福音書」第6章、John Gross, Shylock: A Legend and its Legacy [New York: Simon & Schuster, 1992] 参照) 。

¹⁵ Dombey and Son (1846-48) で、ドンビー氏の太鼓持ちのような役回りを演じる退役軍人のバグストック (Major Bagstock) の名前の無い召使いは、“dark servant” や “ill-starred Native” と呼ばれており、バグストックにこき使われ虐待される。この小説の遠景にはバルバドス、ジャマイカなどの植民地が存在しており、その意味でこの「黒い召使い」はディケンズにおいては例外的な黒人のパルマコスを暗示するとも言えるかもしれない。

¹⁶ オーストラリアのニュー・サウス・ウェイルズにイギリスからの流刑囚を乗せた船が初めて入港したのは1788年のことである。James 146-49.

¹⁷ Asa Briggs, A Social History of England (1983; Harmondsworth: Penguin, 1985) 190-92.

¹⁸ F. S. Schwarzback, “Introduction,” Charles Dickens, American Notes for General Circulation (London: Everyman, 1997) 9.

¹⁹ American Notes 234.

²⁰ テクストは、Charles Dickens, Great Expectations, ed. Margaret Cardwell (Oxford: Clarendon Press, 1993) を用いた。以後も、このテクストを使用し、() 内に、巻、章、頁の順で記す。

²¹ American Notes 236.

²² 「潜在夢」の重要な部分が欠落し「顕在夢」となる過程を、フロイトは「圧縮」といい、「潜在夢」の意味の中心が「顕在夢」で、ずらされることを、「移動」という。Sigmund Freud, The Interpretation of Dreams, tr. James Strachey (Harmondsworth: Penguin, 1976) 参照。

²³ OEDによれば“Negro-head”とは黒色の味の強いタバコである。

²⁴ David Dabydeen, Hogarth’s Blacks: Images of Blacks in Eighteenth Century English Art (Manchester UP, 1987) 86 (Figures 55& 56).

²⁵ 『大いなる遺産』と植民地のテーマに関して、例えば、サイドは、『大いなる遺産』を『ノストロモー』 (Nostromo, 1904) と並ぶ帝国主義下のイデオロギーの対立を示す「偉大な小説」であると述べている。また、ブランドリンガーは、サッカーの『ペンデニス』 (Pendennis, 1850) とディケンズの『大いなる遺産』の中に植民地からやってくる「帰国囚人の物語」があることを指摘している。Edward W. Said, Culture and Imperialism (1993; New York: Vintage Books, 1994) xvi, xxii, 66、Patrick Brantlinger, Rule of Darkness British Literature and Imperialism, 1830-1914 (Ithaca: Cornell UP, 1988) 14-15。さらに、植民

地との関連でディケンズの作品を論じたものとして、Deirdre David, *Rule Britannia* (New York: Cornell UP, 1995) 1-76、Jeff Nunokawa, “For Your Eyes Only: Private Property and the Oriental Body in *Dombey and Son*,” *Macropolitics of Nineteenth-Century Literature*, ed. Jonathan Arac and Harriet Ritvo (Durham: Duke UP, 1995) 138-58、C. C. Eldridge, *The Imperial Experience from Carlyle to Forster* (London: Macmillan, 1996) 151-56がある。

“The Nigger Question” in *Great Expectations*

Takashi NAKAMURA

In the middle of the nineteenth century, Carlyle and J. S. Mill debated about the Nigger question. In the controversy, Carlyle justified white supremacy over the black people, while Mill criticized this so-called white chauvinism. Dickens is known as a Carlylian racist or chauvinist. In this paper I do not attempt to examine his racism; instead, I would like to inquire into the imperial or racial background against which his novel *Great Expectations* (1860-61) was written.

Pharmakos or scapegoat is a central concept of Dickens's works, since this character is used to invoke the reader's sentiment. Some representatives of Dickensian scapegoats are the forlorn child, a woman feminine or not, the subjugated working class and villain/criminals. Magwitch, one of the central characters of the novel, is portrayed as a persecuted and estranged person: he is a “returned convict” from Australia from which he sent money to make Pip a gentleman. Pip the protagonist, however, feels deep mortification because Pip's ascent had been realized by the help of a villain/criminal. Magwitch is somewhat an exceptional pharmakos in that his appearance reflects a black person or slave. He is cut, torn, and bleeding with “a great iron on his leg.” He is an outlaw ostracized from community. Metaphorically speaking, he is associated with anything black; for example, he smokes “Negro head” with a black pipe. As black slaves were confined in prison-like plantations, he was trapped in prison, and even out of prison, he is employed or utilized as if he were a “black slave.”

Inevitably, Dickens was influenced by the politico-cultural environment of the period: on his trip to America in 1842, he witnessed real black slaves being severely tortured and bleeding

(like Magwitch). Moreover, in the mid Victorian period, along with the Nigger question and the Eyre debate in 1865, the rise of anthropology was led by a fanatic racist, James Hunt. This racial movement became, as it were, in vogue. In this context, Dickens wrote his racist essay, “The Noble Savage” (1853). What is more, a particular kind of melodrama in the period became very popular among Victorian people: it was what Brantlinger termed as “racist fantasy”: blacks are treated as wicked whereas whites as good.

The novel was thus surrounded by the Nigger question, black slaves Dickens saw in America, the rise of racist anthropology, and the racist fantasy in Victorian melodrama. And finally, Magwitch smoking “Negro head” or “Blackmoor’s head” reminds us of the colonial tobacco advertisement from 18th century onwards.

(『山形大学紀要』第14卷第3号、2000年、157-70頁)